

第5講座「北海道の出版文化を守ろう！！～出版社と図書館の連携～」

司 会：株式会社亜璃西社出版部編集長	井上 哲 氏
発表者：株式会社共同文化社取締役	竹島 正紀 氏
中西出版株式会社常務取締役	河西 博嗣 氏
株式会社柏艚舎編集部製作主任	山本 哲平 氏
株式会社北海道新聞社事業局出版センター部次長（編集担当）	仮屋 志郎 氏
一般社団法人北海道大学出版会	今中智佳子 氏
滝川市立図書館長	深村 清美 氏

第1部 座談会

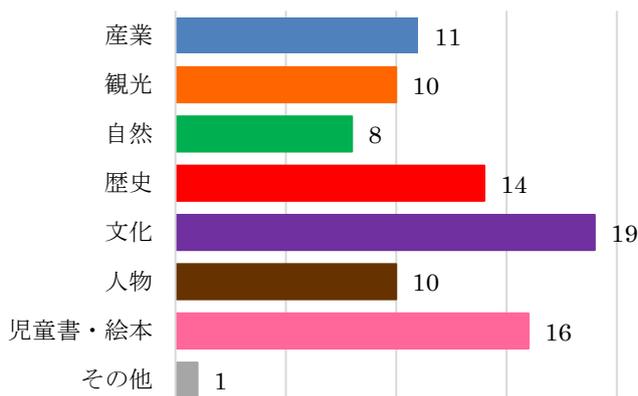
北海道の地方出版社は、北海道ならではの文化や歴史を出版物のかたちで記録してきた。出版業界も厳しい状態が続いているが、本と人をつなぐという共通の使命を持つ図書館と地方出版社で手を組み、コロナ禍で実現できる、未来に向けた北海道の出版文化を盛り上げていく仕掛けを考えたい。

座談会の開催にあたり3つのテーマを設定した。

- ・出版社が作りたいものと図書館が買いたいものの心の溝を埋めるには。
- ・地方出版社の本を購入してもらうために工夫できることは何なのか。
- ・地方出版社と図書館が連携してできることは何か。

これらのテーマにそって事前アンケートを行い、その集計結果（回答数24）を滝川市立図書館の深村館長が報告した後、その内容について話し合った。

1 今後、出版を望む地域資料の分野・テーマは何ですか。（複数回答可）



深村：文化（民俗や芸術、言葉など）をあげる館が一番多かった。地域ならではの資料の出版点数が少ないということなのではないか。

児童書・絵本をあげる館が多かったのは意外だった。子供向けの資料の需要は各館に多いが、郷土の作品は少ないのが現状かもしれない。また、歴史の本も分野としては多く挙げられていた。子ども向けのアイヌ文化をまとめた本が少なく、クラスの児童にいき

わたるだけの資料が集められないという現状がある。学校図書館でもアイヌ関係の児童書は購入されるのではないか。

産業の分野には地域に根差した特産物などのほか、北海道で力を入れている炭鉄港の資料も含まれるだろう。集まりにくいので、図書館が苦慮しているところなのではないか。

レファレンス依頼があった際に図書館にない本を入れたいと思うが、北海道という限定された地域のことを調べたいときには、地方出版社の資料が助かる。

第5講座

仮屋：（求められている書籍が民俗・芸術など文科系ということだが）普通の本屋では売れない分野の本だ。

深村： 資料的価値があると思うものと本屋で人気のあるものとは異なるのではないと思う。図書館だからこそ、この資料は入れておいてほしいというリクエストを受けることもある。

山本： 専門的な本を出した場合、道内の図書館でどのくらい購入してもらえるか。

深村： ルーツ探しなどは、1か月に何件か問い合わせがある。入植当時のことを知りたいとか、道外からも問い合わせがあったりするので、かなり売れるのではないだろうか。

井上： 出版社の場合、需要があっても一体それが何部なのかとシビアに考えてしまう。1万部必要なら作りますよと…。

河西：（第2位が児童書・絵本ということだが）需要が多いわけではない。去年はウポポイのオープンがあり、子どもたちにアイヌ語の響きをわかってもらおうということで（絵本を）出版した。ウポポイでの委託販売はかなり売れているが、それ以外では書店よりは図書館から、むしろ本州の方から、依頼や「よかった」との感想が多かった。

絵本では図書館との連携を一番図っていて、読み聞かせやワークショップの需要があることもわかる。だが、絵本の「次」の本につながらないのをさみしいと思っているし、一番問題だとも思っている。絵本からジュニア文庫などにつながっていけばいいが、お母さんたちは絵本を読み聞かせて満足してしまっている。本の文化を育てる上で、絵本からスタートして次に児童書に向かい本に興味をわく、そして「本って素敵だな」というかたちになっていない。

図書館も「絵本、絵本」と言うのはいいが、その次にステップがいかないのが、北海道の出版文化とか文字に関する部分は他県とは違う状態になっている。出版社の責任として、次のステップのもの＝絵本の次というのを考えなくてはいけないと思う。アイヌ関連のものといった1つの分野ができれば、それがやがて北海道の人にとってプラスになると思う。

井上： 絵本だけではなくて、大人向けの本と絵本の間みたいところを考えていかなければならない。絵本で子どもたちに種をまいておくことは、親が何もしなくても子どもが自分で興味をもって、将来的に本を手にとることもあるので大事なことだ。

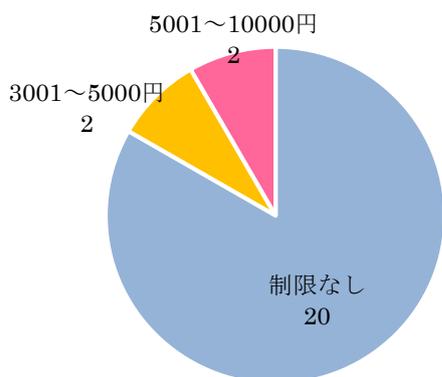
仮屋：（絵本は）作り方も売り方も一般の出版社が手を出しづらい。

井上： 本屋の絵本コーナーは、大手の有名出版社が完全に棚を押さえていて入っていけない。潜在的な書店以外の購入していただける場所ということでは図書館は大事だ。

深村： 4位が産業。中学校や小学校で調べ学習をしたりとか、自分たちの生まれた町の歴史を学んだりしていく際に、調べて、学んで、気づいて、実際に足を運んで…というところで探求心もはぐくまれると感じる。市外の学校からも空知の特産物を調べたいという依頼があったが、なかなか資料がない。振興局のホームページから印刷したものをファイリングしたりして、出版されていない部分を補うことをしている。



2 地域資料を選択する際、購入する価格に制限（上限価格）を設けていますか。



深村： 制限を設けているという館は多くなかったが、5千円以内、1万円以内が上限と回答した館がいくつかあった。資料費が豊富にあるわけではないというのが現実だろう。滝川市も年間で計画的に買っているのだから、突発的に出たものがすぐ買えるかというとなかなか飛びつけない現状がある。

今中：（購入予算については）やっぱりという感じ。1万円を超えると図書館は入れてくれないのではないかと、値段を決めるときには話題になる。

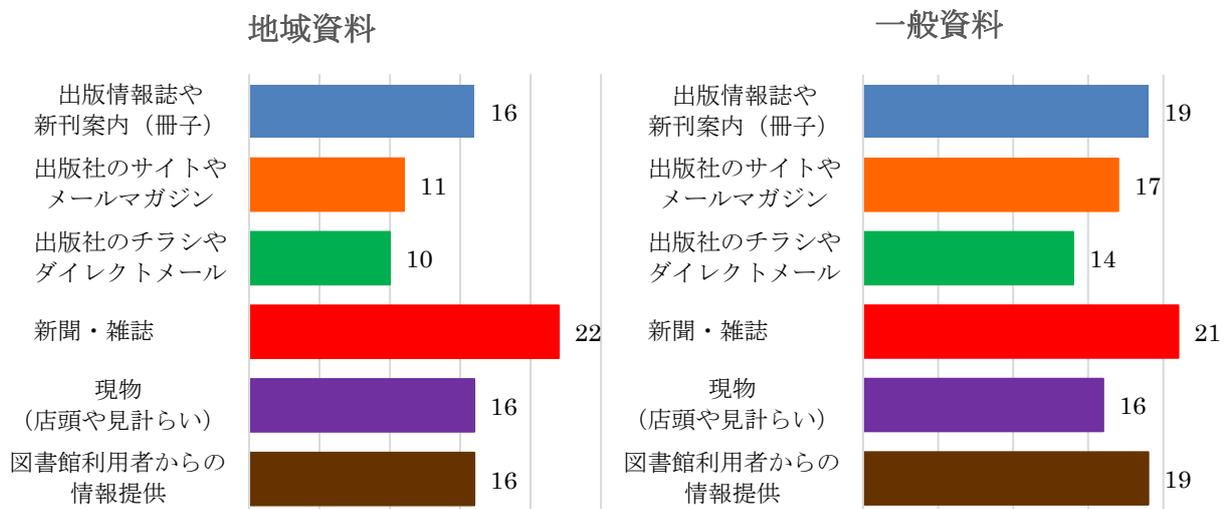
山本： 図書館として当然この本は絶対購入しなければならないというのは（価格が）いくらであろうと入れると思うので、値段でどうこうというのはしていない。

竹島：（出版している中では、北海道ゆかりの画家の作品集が高額だが）それは度外視。売れる売れないではなくて、北海道内で活躍した先生の作品を残したいという思いだ。

井上： 価格を気にしてはいるが、結局図書館でどれくらい買ってくれているのか、意外に調べていない。

3 地域資料を選択する際に、参考とする情報は何か。（複数回答可）

一般資料を選択する際に、参考とする情報は何か。（複数回答可）



深村： 地域資料の選択方法として群を抜いていて、一般資料より票が多かったのが新聞雑誌だった。また、地域資料のほうでは現物選定が2位である。より中身を重視して、しっかり見て購入しているのではないか。ウェブやパンフレット、チラシ、ダイレクトメールなどの情報は比較的lowだった。

井上： 気になったのは、ダイレクトメール（DM）を挙げた方が少ないということだ。ファックスやDMなどは直接送るので効果があるのかなと思っているのだが、図書館としては送られてくるのはどうなのか。

第5講座

深村： 本を選定する担当と郵便物の取捨選択をする担当が違うので、選択する側にチラシ等が回ってこないこともある。

竹島： 四半期に一度、道内の出版状況をまとめて出しているが、今の話を聞くと購入を決定する選書の方と仕分けをする方が違えば送り方を考えないといけない。道内の3か月分の新刊本は掲載している。

深村： 図書館の利用者はリクエストをするときに、新聞の下の方の広告欄をよく見ている。そこをちぎって持ってくる方がかなりいるので、大きい宣伝効果だと思う。最近本は借りていないという人も、それをきっかけにまた図書館に来てくれたりする。



仮屋： (新聞社として) 非常に勇気づけられる話だ。

竹島： 道内で定期的に広告を出しているところに(自費出版する人が)流れているようだが、(1社で枠を買うのは) 厳しい。

今中： 全国紙で安いものがあつたら教えてくださいと言っているが、だんだん(値段が)下がってきているので、広告を出すところが減ってきているという印象だった。出す側が新聞広告にあまり効果がないと思っていて、出稿を控えているのではないだろうか。実際に、新聞広告を出したからすごく反響があつたというのはあまりなくて、書評とか記事になって著者が紹介されましたとかで反響になる。広告を出したから即リアクションというのはあまりない。

仮屋： インターネットやSNSとの接点はどうか。

深村： 地域資料に関してはウェブ上での選択はあまり多くなくて、一般資料は4位くらい。

出版社のホームページやFacebookにアクセスできていない人が結構いるのではないかな。例えば、イベント等の際に道内出版社のホームページがQRコードで読めるようなチラシを作って、各個人で情報が得られるようになるといい。難しいかもしれないが、道内出版社全体の情報サイトがあつて、分野ごとに各社で出された本を表示できるようなものがあると検索に引かかっていると思う。選書のために1社ずつの情報を見るのは難しいが、道内のいろいろな地域資料を扱っているサイトとしてまとめると、何か地域資料を選びたいときにそこを橋渡しにできる。

山本： ここにいる出版社が「道内出版社連合」のような形で毎月新刊情報をまとめて渡したら、(図書館として) 見やすいか。

深村： 全国版の新刊案内では、どうしても地方出版社の情報は後ろの方にあつたり書籍の内容が書かれていなかったりするので見落としがちだ。効果はあると思う。

山本： (新刊案内が実現できるなら) 図書館に、北海道の出版社コーナーを作ってもらえるようにならないだろうか。定期的に、道内出版社がこれだけ出しているというのを目にすることができるようになる。図書館で道内出版社のコーナーを作ってもらえたら、1点ずつではなくてまとまったジャンルでの案内にも注力できると思う。

井上： 道内出版社のスケール感みたいなものを読者にも知ってほしい。

第5講座

山本： 書店では道内出版社のコーナーがどんどん小さくなってしまっているという話があったが、その流れを止めるのは難しい。図書館と協力ができたらと思う。

深村： 手狭になっているところは（コーナーの）場所を確保するのも難しい。展示のスペースを確保するのも大変で、二の足を踏むのではないだろうか。集中的に期間を決めてやるのなら可能なのではないか。

河西： 出版社連合の例としてはHOPPA（北海道デジタル出版推進協会）がある。ウェブサイトもHOPPAでやれば、皆がリスクを少なくやれるかもしれない。だが、HOPPAは電子図書館がメインで、今、道内の図書館で電子図書が入っているのが5館くらいしかない。

本を回していくというのは、いいアイデアだと思う。

北海道の出版文化ということで今回のテーマをいただいたが、戦後、北海道の出版文化のポイントは昭和22年にあった。東京が空襲で焼けて出版社が…。

井上： 有名な出版社が疎開してきていた。

河西： 札幌に講談社の支社があった。昭和22年6月には、北海道出版文化祭が実施された。読書週間というのが、その年の11月に始まった。読書週間は北海道の出版文化祭がきっかけでできたのかもしれないということで、その時期に図書館が北海道の出版社の本を回していくというアイデアだ。巡回して行って、パンフレットも作って、各館が手を挙げたときに加盟店が例えば10冊を棚に置いて、それを読書週間中に回していってもらえたら、購入のきっかけにもなる。

読書週間のきっかけとなる出版文化が北海道にあったということでの位置づけからスタートしていけば「北海道ってそんなのがあったの」となるだろう。育たなかったのは残念だが、81社くらいの出版社があった。今は30社くらいになっている。受け入れ態勢の問題が整理されて、（巡回の）実現が出来たら面白い。書店の棚は難しいので、出版社を応援してもらえればうれしい。

深村： 本も、絶対購入しなければならないとなると二の足を踏む。出版社の協力で借りられるのであれば、（巡回展示を）やってみたいところは出てくるのではないか。

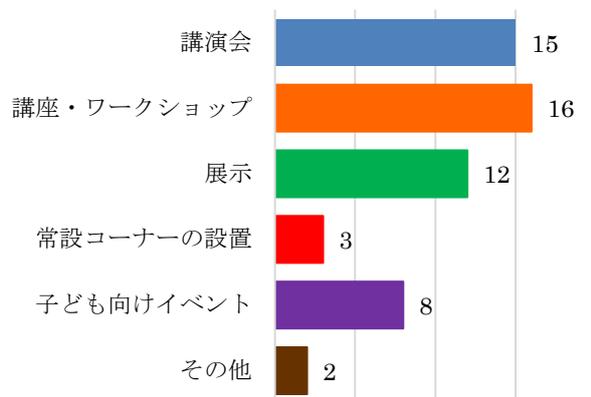
出版社と近くなると、買いたい気持ちになる。今回の講座で各図書館が、こんな出版社があって、こんな思いをもっていて、こんな本を出していて…というのを知って、一つ近くなって、それが購入につながったらうれしい。

キャラバンのような形で当館に本を持ってきていただいて選書をしたことがあるが、近隣の図書館からも司書がやってきた。いろいろな出版社の本に触れる機会はありませんので、貴重な経験だった。

図書館は管内ごとに協議会があって、研修会や総会を行っている。たくさんの自治体が集まっているところに出向いてもらって、選書の時間を設けるようなかたちで提案していけると、確実に出版社と図書館が近くなると思う。「こんなことをやりたい」と思っているが「出版社に連絡してまでは」と思っている人たちにも声掛けできる機会になる。

井上： 直接顔を合わせる機会があると距離感が違ってくる。講座・ワークショップとなると、マンパワーがない出版社としては結構厳しい。回数はできない。本を巡回して展示するとかなら参加しやすい。ぜひ前向きに進めたい。

4 出版社と連携を希望する事業はありますか。(複数回答可)



深村： 講座ワークショップを開催したい、講演会をやりたいというのが1位2位をしめた。

子ども向けイベントも票が多く、図書館で目玉となるイベントの1つとして、単発での連携を求めていると感じた。子ども向けイベントは、どこの図書館でも行いやすいというのもあると思う。児童書や絵本の出版を希望するという意見にもつながっているのではないかな。

井上： コロナの状況も良くなるが、図書館のイベントはやっているのか。

深村： (滝川市では) 人を集めることはやらないという方針を決めた。日常的な来館は制限していないので、作家を呼ぶワークショップなどをすべて原画展に振り替えて、セミナーもオンラインでやるように切り替えている。

山本： イベントとしてコロナ禍でできるかはわからないが、各出版社の本はこういうふうにつくられるとか、本の校正はこのようにやるといったセミナーなら、地方出版社と図書館が連携してネット配信などができると思う。各出版社とも自費出版や記念出版の部署があると思うので、そういったセミナーも開けると思う。

深村： 作家や書き手の方たちに講演会をやっていただいて、その場で販売をするようなイベントをやってほしいところがあるのではないかな。市内の書店にも協力してもらって、地域還元もできる。

仮屋： 図書館大会もそういう場になりえるのか。

井上： (講座等は) 図書館ならではの専門的な部分を中心だが、お互い本を好きで仕事をしているので、知り合って語り合えるのはいいことだ。

地元出版社も、もともとはバラバラにやっていたが、HOPPA等のつながりができてきた。出版状況が厳しくなっていることもあり、みんなで協力できることは何かという機運が高まってきて中で、深村館長とも出会うことができた。

状況は厳しいと言いつつも、コロナ禍の巣ごもり需要もあってか、本に戻ってくる人も増えている。本を読んでもらえるという良い状況の中で、(図書館には) 地元出版社と本が好きな人を結んでもらえたらと思う。

第2部 各社 出版への思い・おすすめ本紹介

座談会に参加した出版社の6名が、それぞれに各社の歴史や出版状況、特色などを説明したほか、近年出版した本、これから出版予定の本等を紹介した。

【紹介された本等 (紹介順)】

■ 亜璃西社

『増補新装版 北海道樹木図鑑』佐藤孝夫／著 2017

『21-22 北海道キャンプ場ガイド』亜璃西社／編著 2021

第5講座

- 『増補版 北海道の歴史がわかる本』桑原真人・川上淳／著 2018
『さっぽろ燐寸ラベルグラフィティ』上ヶ島オサム／著 和田由美／編 2021
『北海道開拓の素朴な疑問を関先生に聞いてみた』関秀志／著 宮崎メグ／イラスト 2020
『出土品で知る北海道の暮らしと文化（仮題）』2021 出版予定
『地図の中の札幌』堀淳一／著 2012
『さっぽろ野鳥観察手帖』河井大輔／著 諸橋淳／写真・イラスト 佐藤義則／写真 2019

■共同文化社

- 『おいしくつくろうよ』東海林明子／著 2021
『こんな近くに！札幌農業』札幌農業と歩む会／編著 2020
『自治体の行政執行と法治主義』秦博美／著 2021
『ビジネスモデルの経営学』関根勇／著 2021
『季刊アイワード』 第10号（通巻356号） 2021.7.15

■中西出版

- 『ほっかいどう百年物語』上巻 STVラジオ／編 2018
『おぼけのマールとモーニングのあとで』なかいれい／絵 けーたろう／文 2021
『ねぐせきょうだい』加賀城匡貴／絵・文 2021
『知らなかったこんな旭川』NHK旭川放送局／編著 2013
『旭川歴史市民劇 旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ
ーコロナ禍中の住民劇全記録ー』那須敦志／著 2021
『ゆきゆきゆき』
ほんままゆみ／作 みちいずみ／文 マラ・ベネマン／英訳 ほんまこうすけ／英訳 2020
『町村金吾の二十世紀』若林滋／著 2020

■柏艫舎

- 『新版 絵はがきにされた少年』藤原章生／著 2020
『生還 「食人」を冒した老船長の告白』合田一道／著 2020
『うんちエイジング』高野正太／著 2021

■北海道新聞社出版センター

- 『緊急出版 報道写真集 2018.9.6 北海道胆振東部地震』北海道新聞社／編 2018
『北海道夏山ガイド』シリーズ
『世界遺産 北の縄文』北海道新聞社／編 2021
『総天然色 ヒギンズさんの北海道鉄道旅 1957-70』J・ウォーリー・ヒギンズ／著 2021
『サチコさんのドレス』桜木紫乃／文 そら／絵 2021
『北海道新聞が伝える核のごみ考えるヒント』関口裕士／著 北海道新聞社／編 2021

■北海道大学出版会

- 『北海道の蝶』永盛俊行・芝田翼・辻規男・石黒誠／著 2020
『日本産ハバチ・キバチ類図鑑』内藤親彦・篠原明彦・原秀穂／著 伊藤ふくお／写真 2020
『〈沈黙〉の自伝的^{オートエスノグラフィ}民族誌』石原真衣／著 2020
『アイヌから見た北海道 150年』石原真衣／編著 2021

（出版情報は2021年11月現在）